

会津から、 世界を考える

新潟県との県境にある西会津町と、すぐお隣の喜多方市。
この2つの場所では農場を営む家族がいる。
「チャルジョウ農場」の小川さん一家だ。
30年以上に渡って有機農業を続けてきたが、その最大の特徴は「無灌水栽培」という農法にある。
常識をガラリと覆す、画期的な農法なのだ。



（左）新潟県喜多方市、（右）福島県西会津町。両町が経営する体験宿泊施設「ターナービレッジ」の前で。



光さんが品種改良して育てた「涙の泉」。乾燥に強い品種である。



家族の思い出。「ドナドナ」された時代を話す末明さん。



長男の末明さんが育てたトマト。様々な品種が混ざる。



光さんのダットサン。走行距離はメーターが振り切れた「たぶん28万キロ」。



小川光さん。トルクメニスタンで見つけた白い帽子がお気に入りだ。

転々とし、研究に明け暮れた。根っからの研究好きの光さんだが、研究員が試験場にこもって研究するあり方には疑問を持った。喜多方農業改良普及所時代には、研究員が周りの農家に入り耕作をする研修制度を提案し、実現させた。現場主義の科学者

である。周りの農家の相談にもよく乗っていたようだ。加えて「おかしいことにはおかしいと言っ」一直線な性格で周りとはぶつかることが何度もあった。長男の末明さん(44)は語る。「ゴルフ場開発計画があると、それに反対し

て「ゴルフ場はいらない」とトラックにペンキで書いて抗議する。職場までの10km以上の道を自転車でも夏も冬も通勤する。学校では「ミハルの親父を見たぞ！」と馬鹿にされましたよ(笑)」。と当時を振り返る。

水のない畑

こうした県職員時代に、特別な縁が生まれたのが会津の喜多方市だった。喜多方市の山間部には戦後の食糧難を補うため多くの耕地が開拓されたが、水利条件が悪く耕作放棄が広がっていた。その中で、光さんは山都地区のある畑と出会った。そこは優れた野菜ができて土はよいが、どうにも水の便が悪い。人里離れた山の中にある畑で、周りに川や水路は皆無。さらに狸やハクビシンが跋扈する環境だった。美味しいいきゅうりができたことでその土地を気に入った光さん。だがそれは露地栽培の話。獣害を避けるためハウス栽培を始めると、雨が入らず水不足に悩まされた。あきらめるのが普通の人が、光さんは研究魂に火がついたのだろう。水もやらず、農業もやらないでここで野菜を栽培する。独自の栽培技術の探求が始まった。

無灌水栽培

通常、トマトをハウスで栽培する場

白髪頭に白い帽子。年季の入ったダットサンで現れた小川光さん(74)。どこから見てもただものではない。農場の名前は「チャルジョウ農場」。かつて訪れたトルクメニスタンの都市から命名した。農業の研究者であり、実践者でもある。「無灌水栽培」という、ごくわずかな水だけでトマトやメロンを育てる技術に精通しているのだ。その技術をトルクメニスタンやカザフスタンなど中央アジアの乾燥地帯でも実践してきた。

三代続けて東大卒

光さんの出身は東京都練馬区。光さんを含めなんと三代続けて東大を出たそうだ。親戚にも外交官や学者が多いエリート一家。しかし少年時代から野菜作りに親しんでいた光さん。東京大学で農学を専攻後、卒業後は官僚になる同級生が多い中で、福島県の農業職の県職員を選んだ。「自然に根ざし、地域に溶けこむ仕事があった」と考えていたからだ。いわき、郡山、喜多方など県内の農業試験場や普及所を